

CASE 2

自己完結せず他者と共有することで、 失敗は大きな価値を発揮する

筑波大学附属坂戸高校（埼玉・国立）



2024年度卒業生
佐藤優磨さん



3年生
大島章護さん

先生の言葉に背中を押され、 失敗を共有するイベントを開催

筑波大学附属坂戸高校では、隠岐島前高校の「失敗の日」にならい、生徒主体で独自の「失敗の日」を実施している。45代生徒会長で現在は秋田大学1年生の佐藤優磨さん、佐藤さんと共に生徒会に所属していた現・3年生の大島章護さんは、「自分たちの代で、何か大きなことをやりたいと思っていた」と振り返る。

佐藤さん、大島さんの背中を押したのが、「今年はなにか面白いことやらないの？」という、本司康之先生（現・副校長）のひと言だった。「何かやりたいという気持ちはあったものの、具体的に何をどこまでやっていいか掴めていなかった。そんなときに先生からやったらいいじゃんと言われて、あ、やっていいんだと気づいた」と大島さん。調べるなかで隠岐島前高校の取組を知り、「いい意味で失敗する機会をたくさん与えられてきたうちの学校でもできるんじゃないか、やってみよう」と思った」と言う。

また、佐藤さんは、「筑波大学附属坂戸

戸高校は、授業でも課外活動でも探究活動に積極的に取り組む学校」と説明。「探究では成功例が目立ちがちだけど、成功には失敗がつきもので、裏には失敗もたくさんある。その失敗をただ内省して終わらせるのではなく、外部に公開して評価やフィードバックをもらう場をつくりたい、失敗の日をその機会にしたいと考えた」と振り返る。

生徒の自主性・主体性を重んじる同校では、「先生たちは基本的にノータッチ」と佐藤さん。一方、「生徒だけでは解決できない課題に直面したときに相談すると、真摯に向き合い、アドバイスをくれた」と言う。

失敗を解放することで前進し、 他者の失敗に勇気づけられる

こうして2023年12月に「失敗の日」と銘打った一般公開型のイベントを初開催。同校の生徒に加え、他校の生徒や受験生とその保護者らも参加した。柱はポスターセッションで、プロジェクト型の自主活動に取り組み生徒らが自らの失敗やそれを乗り越えた過程などをポスターにまとめ、来場者に説明して

意見をもらう場とした。具体的には、「代替わりの際の引き継ぎがうまくいかず、団体の活動目的や理念がすり替わってしまった」「報・連・相が不十分で、取材を申し入れたが断られてしまった」などの失敗事例が見られたという。

翌2024年には、本来の失敗の日である10月に第2回を実施。いずれの年も、実施後には生徒会のメンバーで振り返りを重ねた。「失敗について話すことで、自分の中で溜め込んでいたものが解放されて心のもちようが楽になり、次のステップに進みやすくなったのではないかと感じた」と佐藤さん。また、大島さんは、「失敗の日は、生徒、特に下級生にとって、勇気づけられるイベントになったのではないかと続ける。

「優秀に見える先輩たちも、みんなと同じような失敗をしてきたことや、それを乗り越えてきたプロセスを知ること、先輩たちは特別でなく自分たちと同じなんだ、自分たちになってできるんだという気づきや励みになったと思います」（大島さん）

失敗の日が同校の生徒に違和感なく受け入れられた背景について、佐藤さ



1



2



3

1 自主活動団体の広報メンバーが失敗談を語ったトークセッション。2 校則について、受験生や保護者を交えてディスカッションする企画も開催。3 自主活動（T-GAP）で起きた失敗やそれを乗り越えた過程をポスターにまとめ、来場者に説明。

んは「本校には、失敗は悪いことではない、とりあえずやってみよう、という風潮がある」と言う。

「根底には、世の中には正解がなく、物事に取り組む過程で何を得るかが大事……という考え方があって感じます。また、自己をオープンにしている先生が多いことも影響していると思います。だから、失敗に対する恐怖心はあまりありませんでした。授業中も、みんな間違いを気にせずに手を挙げたり意見を言ったりしていましたね。とはいえ、人はつい成功談を話したくなるもの。その反面で失敗を誰かと共有したいという思いも抱えていると思うので、失敗の日はとても良い機会になったと思います」(佐藤さん)

同校では今後も、失敗の日の取組を継続予定だ。「本来の目的と理念は受け継ぎつつ、型にとらわれず、自分たちらしい失敗の日をつくってほしい」と大島さんは後輩たちにエールを送る。



1 地元のコーヒーショップ「KOJIMA FOK COFFEE」とのコラボ商品企画案について発表する生徒。2 役割分担をしつつ、協働してプロジェクトに取り組む生徒たち。3 「岡山県展示大商談会フードマッチングフェア」に出展し、「くらしぎ たこSUNカレー」「たこやきBeans」など開発に携わった商品を紹介。

CASE

3

「想定外」こそ成長のチャンス。 主体性を引き出す商品開発への挑戦

倉敷鷺羽高校(岡山・県立)



ビジネス科
石橋毅士先生

うまくいかないからこそ、
「なんとかする力」が身につく

倉敷鷺羽高校のビジネス科ならびにビジネス研究部(部活動)では、「こじまつちんぐ」と名づけた生徒主体の地域活性化プロジェクトに取り組んでいる。生徒が間に入って地元・児島の事業者同士をマッチングし、観光資源を活かしたマイクロツーリズム事業や地元の食材を使った商品開発を実現。高校生が企画・開発に携わる商品を全国から集めて販売するマルシェの開催などを通して、その活動は県外にまで広がっている。「こじまつちんぐ」は、「課題解決型商品開発」として設計されたプロジェクト。

利害が対立する当事者を意図的に組み込み「生徒にあえて失敗や想定外の経験をさせるよう設計している」と、ビジネス科の石橋毅士先生は言う。「いくら計画を立てていても、いざ動いてみるとうまくいかないことが次々と起こるもの。事業者間で板挟みになることもあるでしょう。想定外の出来事や壁に直面することで、自分でなんとかする力や失敗を次に活かす力が身につきます。失敗を乗り越える過程が学びになり、生徒自身の成長につながると感じています」

「生徒たちは、それぞれの得意なことを活かせるよう役割分担し、互いにサポートし合いながらプロジェクトを進めています。うまくいかないときは、すぐに教員を頼るのではなく、まずはチームのメンバーと課題を共有し、解決策を考えます。時には、他のグループに意見を求めることも。自分だけで抱え込まないためにも、気軽に相談できる関係性づくりを大事にしています」

「こじまつちんぐ」などの取組を通して、生徒には「人とは違う視点で考えて、課題解決ができる創造力と主体性を身につけてほしい」と石橋先生は言う。「A」が仕事を奪う……などと言われるなか、生徒には「A」にはない創造力と主体性を身につけてほしいと考えています。こちらが準備をしてあれこれ指示を出してしまうと、生徒は言われたことをやるだけで、自分の頭で考えて創造する力も主体性も育まれません。児島にどのような課題があるか、その課題を解決するために何がやりたいか、自らアイデアを考案し、失敗も含めて試行錯誤することで、課題が自分ごとになり責任感が生まれるのです」